



ツド^{||}ヴァレリー 往復書簡 ②

二宮正之訳

筑摩書房

Titre : André Gide à Paul Valéry
dix lettres inédites
in Bulletin des amis d'André Gide,
vol. IV, n° 29, 1976
Auteur : André Gide
© Catherine Gide 1976

ジッド = ヴァレリー 往復書簡 2 1897-1942

1986年10月25日初版第1刷発行

訳者 二宮正之
発行者 布川角左衛門
発行所 株式会社筑摩書房
東京都千代田区神田小川町 2-8
電話 東京 291-7651 (営業)
294-6711 (編集)
郵便番号 101-91
振替 東京 6-4123
印刷 株式会社精興社
製本 株式会社鈴木製本所
ISBN 4-480-83083-9 C0098

75.200-

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが、小社読者係宛
に御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

一八九七年	3
一八九八年	44
一八九九年	120
一九〇〇年	168
一九〇一年	191
一九〇二年	211
一九〇三年	223
一九〇五年	237
一九〇六年	244
一九〇七年	256
一九〇八年	259
一九〇九年	269
一九一〇年	274
一九一一年	277

一九二九年
一九二八年
一九二七年
一九二六年
一九二五年
一九二四年
一九二三年
一九二二年
一九二一年
一九二〇年
一九一九年
一九一八年
一九一七年
一九一五年
一九一四年
一九一三年
一九一二年

445 444 438 434 429 420 417 401 394 383 378 350 321 320 300 297 278

一九三一年

一九三二年

一九三三年

一九三四年

一九三九年

一九四〇年

一九四一年

一九四二年

補遺書簡

訳者あとがき

451

454

461

462

463

466

471

481

491

二宮正之
507

ジツド ヰ ヴアレリー 往復書簡 **2**

一八九七—一九四二

ジッド・ヴァレリー往復書簡 ANDRÉ GIDE - PAUL VALÉRY : CORRESPONDANCE 1890-1942

発信年月日、発信地欄の「」内は編者ロール・マルレ、（ ）内は訳者による補足である。原本未収録の未刊行書簡は、訳者の調査しえた範囲で、*印を付けてその存在を示した。詳しくは訳者あとがきを参照のこと。

二三 ヴァレリーからジッドへ

〔一八九七年一月一日の消印、パリ〕

おーい君

数日前に箱詰を送ったんだけど、着いたんだろうか。無事だったかなあ。こんなことをたずねるのは、賤しむべき連中が、もしかしたら、横取りしてしまったかもしれないので、必要な場合、手を打つためなんだ。(あの手合ときたら、疑ってやるだけでも買いかぶりというものさ。)

マラルメにランボー論(二)をもらったので、ここ数日、読んだんだけど——むしろ批判的で小意地が悪い。おめでとう、云々……。

ヴァレリー

『エル・ハジ』(三)覚え書。

岬の孤絶せる、神秘の拡がりたる(三)

*

重要な指摘。作中人物と主題とが抒情的な散文の内に融合しており、識別いしがたいほどだ。両者が何かこ

う腫れとでもいったものの内にどっぷり浸かっている。例えば、主君の死に際してエル・ハジのおぼえる困惑はきわめて興味深いものだが、それが際立ってこない。読む方は一向に困惑しないのだ、文章が流れて行きさえすれば、努力せずに——いわば自動的に——事態が解決するとわかりきっているので。読者にこういう感じを与えることは避けるべきだ。これは文学の一切をぶちこわしてしまふ。

*

奇妙なことに、このコントには現実性が欠けており、それが幻想性の欠如に応える。だから、可能には違いないが、本当にありうることは全く思えない。ここで最も重要な人物は、結局、人民であるが——その姿は見えない。

*

熱狂によってのみ存在しうるものに用心したまえ。

*

過度なまでに守られている釣り合い、非常に快い構成。文体は、それにしても、内容にややそぐわない。君は言葉を配置する前にクロロホルムで麻醉にかけている。

E・T

(一) マラルメは北米の雑誌『ザ・チャップ・ブック』The Chap Book の一八九六年五月十五日号に、フェリクス・ヴァロトンの描いたランボーの肖像とあわせて、ランボー紹介の一文を発表した。小林秀雄がランボーの本質を見抜いた卓見として、ランボー論(特に『ランボオIII』)の土口にすえてゐるのが、このマラルメの文章である。Stéphane Mallarmé: Œuvres complètes, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1961, pp. 512-519 参照。

(二) 『ヘル・ハジ』は書簡集に見たとおり、一八九六年の夏に執筆され(マレが一八九七年としているのは誤り)、一八九六年九月

『ル・サントール』誌の第二号に載り、一八九九年に『フィロクテテス』と合わせてメルキュール・ド・フランス社から出版される。ロベール・マレはこの作品の文体を次のように評している。「このコントの文体はかなり特殊なものである。ジッドはセンチメンスを引き延ばす実験をしており、もう文末かと思うところから、また好きなように繰り返して続けていくのである。」一八九九年七月六日の書簡^{二四}で、ヴァレリーは『エル・ハジ』を再びとりあげ、ジッドの文体を批判する。

(三) 共に『エル・ハジ』中の表現で、修飾語と被修飾語の語順が逆になっている。

(四) エドモン・テストつまりテスト氏の頭文字〔マレ註〕。

三三 ジッドからヴァレリーへ

〔一八九七年一月三日の消印、パリ〕

親しいポールさんよ

明後日（火曜）にパリへ戻る。メルキュール社で君に会えるように十分早目に行きたいと思っている。カルティエ・ラタンと一緒に夕食をしよう。都合が悪い場合はコマーイ街の方に一報乞う。

たしかに、巨大な箱入りの飴、落手した。お礼を言うのが遅くなって申しわけない（四日前から、一瞬も一人でいることができないんだ）。箱にはおいしいものがぎゅっちり詰まっていた。（モンペリエは実際先頭を切っているようだね。）とくに詰め物をした果物のすばらしさ。家族の者は、皆くいしんぼうなので、これぞとばかりたっぷり味わった。以後、もし君がわが一族の誰かに出会ったら、「ぼく、あの、えーと、飴を……—ああ、それはそれは、大層けっこうなものをおいただきまして、云々、どうぞおかけ下さい」ってな具合だろうね。なぜって、ここではテスト氏がしかるべき待遇を受けるかどうか、大いに疑問だから。この

町は実に恐ろしい。毎朝目が覚めると、深々とした夜を過ごしたというのに、まだ眠り足りないような気がする。

では君、また。《甘いもの》、重ねて有難う。火曜の夜、会えるんだろうね。

君の

アンドレ・G

二四 ジッドからヴァレリーへ

(一八九七年一月二十日の消印)

おい君

どうみても喋りすぎた。それにフォールは確かじゃなかったんだ。どうしたらよいと思う？ ぼくは一切変更しないつもりだ。GとRとFが同意しないだろうってことは前もってわかりきっていたのだからね。具合の悪いことにどうもひどい風邪を引いてしまって、動き回れないんだ。

心から君の

A・G

(一) おそらく、ヴィエレグリアン、レニエ及びフォールのことか。ここでジッドはマラルメの評価をめぐって交された論争にふ

れている。一八九五年一月以来、かつては象徴派に属し、マラルメの火曜会にも行ったことのあるアドルフ・レテ（一八六三—一九三〇）が、『ラ・ブリュム』誌を舞台に、マラルメを激しく批判しつづけた。一八九七年、ルイ・ド・サンロジャックがレテの後をつぎ、同年一月一日号の『ラ・ルヴェ・ブランシュ』誌にマラルメの発表したヴェルレーヌ追悼のソネット『墓』を罵倒する文章を『ラ・ブリュム』誌の一月十五日号に載せた。それに対し、マラルメの人品に絶対の尊敬を抱きつづけていたジッドが『抗議文』を綴り、『メルキユール・ド・フランス』誌の編集長あての公開文という形で発表しようとする。その意図をマラルメに伝えた手紙は次の通りである。

「友情によって親しみをなお一層増された親しい先生

『ラ・ブリュム』誌に近頃載った先生に対する批判にはすっかり腹が立ち、反駁せずにはいられませんでした。このような幾つかの論評を黙殺するのは、先生を尊敬する者の慎しみというものでしょう。それはわかっておりましたが、ド・サンロジャック氏などが、それで意気揚々としているのは見るも不愉快です。そのことをヴァレットに宛てた書簡において、私は最善をつくし、もっとも正統な立場から述べたのです。その書簡は『メルキユール』誌の二月号に出ます……。反論したいという私の気持を知った何人かの者は、私の小文に合わせて署名しようと申し出ました。賛同の意を表わそうというわけです（この場合、文学の問題は完全に脇へのけての話です。むしろ『品性批判』とでも言うものとお考え下さい）。人民投票のようなものでないことはおわかりいただけると思います。アカデミー会員を選ぶように先生を票決にかけるのではないのです。署名はほんの少数しか受け入れまい、しかし、それぞれ重みのある署名で、評論家はことわり、芸術家の、しかも非常に異なった芸術家の署名にしよう、ということになりました。それで、ヴァレリー、ヴェルハレーン、シュウオプ、グリファンが名を運べるでしょう。私としてはポール・フォールにも署名させたいと思います。先生のお名前にたよらない人たちは、彼を師としている人がいますので。六名で十分と思いますが、いかがでしょう。レニエの署名を見て驚く人はいないでしょうから……つまりは無駄です。」(Henri Mondor: *Vie de Mallarmé*, Gallimard, Paris, 1941, p. 749)

マラルメはこの愛情の表現に心を打たれるが、論争よりは沈黙を好む。ジッドはマラルメの意志を尊重し、公開状を取りやめにしようとするが、『メルキユール・ド・フランス』誌の二月一日号に『抗議』と題して出てしまう。その全文は次の通り。

「親愛なヴァレット

——『ラ・ブリュム』誌において、まずレテ氏が、そしてその後をついでルイ・ド・サンロジャック氏が、マラルメ氏を非難攻撃している文章を、恐らく貴兄も読まれたことと思います。もしルイ・ド・サンロジャック氏が最近のように、我々が黙っているのは彼らの意見を認めているからだなどと言ひ出さなければ、どちらに対しても反論はしなかつたでしょう。

しかし、事がこままで来ては、抗議する必要があると思います。今まで、誰一人あるいは殆ど一人も彼に応酬しなかつたのは、決して無関心だったからではなく、単に、無礼千万な攻撃に対してこちらは礼を守っていたことだという点をレテ氏にわからせるべきです。

レテ氏がかつて私という人間に多少の共感を示し、私の書くものをいくらかは評価してくれましたので、私としては話しやすい。

また、生まれたばかりのいくつかの雑誌と何人かの評論家とがレテ氏の文章に時には天才のひらめきを認めていますので、私の憤慨の念は、ルイ・ド・サン・ジャック氏よりはむしろレテ氏にさし向けたい。サン・ジャック氏には今までのところ、粗暴な言辭以外のものは認められないのですから。

私はレテ氏の無理解を責めようとは思わない。しかし、たとえ自分は心から賛嘆することができなくても、少なくとも、尊敬するに値する一人物に対して、あのように罵詈雑言をあびせるとは何事か。ここでは、文学は一切脇にのけての話です。かの紳士連はそれにはおかまいなしなのです。それに、彼ら自身、はっきりと言っている。何よりも殴り合いをしたいのだと——いやむしろ殴りたい、《殴り殺したい》のでしょう、そうでなかったら、よりにもよって、一度も殴り返したことはない人物を、こんなふう

に襲うことはないでしょう。

『ラ・ブリュム』誌が面白半分にマラルメ氏を《詩人の王》と宣告したのはそう昔のことではありません。それが今、ド・サン・ジャック氏によって《トルコの頭》と呼ばれ嘲罵のまよになつたところで、マラルメ氏は前の時と同様にさして心を乱されはしまいと思ひます。しかし、多くの時評家たちがド・サン・ジャック氏が勝つたのだと思ひ、その尻馬に乗って、マラルメ氏はたった一日だけの見せかけの神だった、それが仲間のすべてから突然見捨てられた、などと喚きはじめないともかぎらない、——それというのも、マラルメ氏を讚美する人々が氏を中傷する連中のように少々やかましく下品な習性をもつておらず、ジャーナリズムや殴り合いよりは文学と芸術とに心を砕いているためなのです。そこで、この手紙を貴誌に載せて下さるよう、お願いする次第です：。そして私自身こうして《論争の場》に降り立つには、『ラ・ブリュム』誌のあまりのえげつなさに対する憤慨の一念につき動かされてのことと御諒解ねがいます。

アンドレ・ジッド

この後に、ポール・ヴァレリー、マルセル・シュウォブ、ポール・フォール、エミール・ヴェルハールンが署名しているが、予告されたヴィエリグリアンは、なぜか、署名していない。

二五 ヴアレリーからジッドへ

僕の親しいアンドレ

〔一八九七年二月二十二日の消印〕、モンペリエ

やっどピエールから手紙が来た。彼は保養中なんだ。彼の言うには本当に往生すると思ひ、電報は最期の別れのつもりだったとか。マンデス、ポエル等の弔辞を予定していたという。彼の手紙は本当に心を打つ。

僕自身は調子がよくなってきた。もっともよくなったというこの本当の意味合いについては少しも幻想を抱いていない。自分が絶えず凡ゆる徴候によって折りあらばと様子を見られていることが今ではよく判っているからね。別の言い方をするなら、僕はごく狭い限界の内においてのみ元気でいる権利があるんだ。仕事はまだ戻ってこない。敬虔な気持を抱いて机に向かうが、それは退屈するためなんだ。

ところで、昨日、僕が高く評価しており、その人からはバリにいる誰からよりも多くの反論とより執拗にかみついてくる能力とを引き出しうると確信しているある判事を相手に、マラルメについての代物を書くときに用いるつもり（これは、もし書くとするならの話だが）、文学心理上の理論を説明して、少しばかり満足を覚えた。

こうして極めて緻密な会見をした結果、ぐずぐず言わないで『体系』を書き上げ思い切って発表してしまいたいという気持になりかかった。僕は、自分の仕事の内にどんな不条理なことが隠れているか知れないと長いこと心配してきた（そして事実、それはあるんだ）。しかし、事実なり観念なりで、僕の事に魚雷を打ち込み水底に追いやってしまうほどのものには、いかに誠実に考えてみても、まだ出会ったことがない。ただ、個々のテーゼをどのようにつなげるか、その順序がまだ正確に判っていない。それに、設計図は引いてあるもののいくつもの建物をそっくり構築しなければならないわけで、——そうになると、労働と忍耐の方はどうなる？

こういうものを出版して的に達しうるとわかっていれば、つまり議論を呼びうるならば、実行しようと思ふ。でも、そんなことはありそうもない。僕は、しばしば、奇妙な反対意見を唱えているのだが、それはこ

ういうものだ。自分の試みたことがあまりに自然に思えるので、何世紀も前に他の人々がそんなことを夢想しなかったのに驚きかつ仰天してしまう。そこから、これはどうも怪物が底にひそんでいるぞと思うには、一歩しかない。

母が君の奥方と君とに友情の限りをこめてよろしくと言っている。

ポール・フォールに挨拶を送り、君を抱擁する。

どうか手紙をくれるように。

ヴァレリー

(一) 一八九七年の一月から五月まで、ピエール・ルイスはアルジェリアのフォンテーヌ・ブルーに滞在。一月末に重い気管支肺炎にかかる。この期間に、新編『ピリテイスの歌』を執筆。また、ゾーラ・ベン・ブラヒムと関係を結ぶ。書簡三三のムーア人の女というのがこれである。

(二) アンリ・ポエル(一八五二—一九一五)は時評家、小説家、劇作家で、アカデミー・ゴンクールのメンバー・ポエルの父(「マレ註」)。

(三) ヴァレリーはすでに一八九一年にマラルメについて書く意図をもらしていたが、一八九七年の二月から五月にかけて、マラルメ試験のノートを書き残した。これは未完のまま放棄されたが、フランス国立図書館に草稿があり、ヴァレリーの言語観、文学観を知る上で貴重な資料である。Colloque Paul Valéry, Université d'Edimbourg, Nizet, Paris, 1978 の巻末(pp. 322-327)に収められたテキストにより、その最終段階を訳出する。

「数年前のこと、マラルメ氏の作品を、僕は官能の喜びをもって識った。それは、書きものが通常どかんと襲いかかってくるのも一段と強力な行為として、僕を捉え、その後は、また別のいくつかの動機から、僕を引きつけた。

この喜びについては、これ以上には語るまい。僕は確かに感じたのだが、その証拠を示すことはできないだろうから。論証できないことをほめかしたりはしない。他者に、僕個人の印象が彼のもの——つまり一般的なものと、信じこませたりはしない。もっとも、文芸批評というものは、昔から、常にそういうことを苦労してやってきたのだが。また、ある人間の意見などというものは、他の誰を動かす力もないものなのだと思う。僕自身の意見にしたところで、それは、混ぜあわせるべき、他の無数の意見の

象徴として、僕の注意を引くにすぎない。したがって、賞讃や非難はしないことにする。そういうものは、他人に伝えるや否や、たんに無意識が洩れ出たもの或いは他人を欺こうとする試みとしか思えず、いずれもそれ自体としてまったく無用なのである。なぜなら、確証することは不可能で、その対象とは全く無関係であり、各人が、好きなように、やすやすと、——自分の好むところをもって置き換えることができるからである。

ここで扱うのが、文人のむれからもっとも孤絶した作家、ジャーナリストの花形にもっとも理解されていない作家である以上、いかなる場合にも増して、僕ひとりに関わることは言わずにおくべきだ。例えば、才能についても、天才についても、美しさについても、またそういうものの逆についても、語らぬこと。そんなものは、オカルト的特性であり、文学的効果の眞の性質をごまかすのに役立つだけなのだから。それはまた、個人的な感情の固有名詞なのであって、他の個人にほんの少しでも抵抗されれば、ひとたまりもなく崩れてしまうのである。反論の余地のないことだけを断言すべきなのだろう——誰でも見たいと思えば何度でもはっきりと見られる物体のような事実のみを。そこで、これらの事実の一つないしいくつかの体系を提示し、その際、意志にもついたこのような構築に、まったくの仮定としての性格を——他の場合、これを隠すことはいとも容易なのであるが——保たせることになろう。ここでいう、事実あるいは与えられた現象とは、書かれた文章である。しかし、なしうる限りの純粹に描写的な確認をもあわせ見なければならぬ。そこで、語順、文の規模、反復などが出てくるが、それらは、テキストと同様に、一切の議論をこえたものである。

いまは、対象とするテキストの抽象的、なある種の特性に関していくつかの推定を下し、自分がとることを明言した分析法に導かれて得るに至った結論を示すにとどめよう。マラルメ氏の仕事を導いている考え、或は僕がそうと思っているものについて述べることもしないでおこう——僕の扱う対象——つまりマラルメの作品——を常に、既知の固定されたものとしておくために。

徐々に、この作品と僕の精神とが接近するにつれて、僕は「慢性的な」文学のひとつの特殊な努力とは別のものを行間に見てとった。到るところに、絶えざる探究の徴候とまったく新しい試みの痕跡とがあった。それらの指標は、僕の精神の中で、制作というものの概念をゆるやかに移動させ、ついに僕は非常に違う具合にそれを味わうようになった。何にも増して、ひとつの意志が輝いていた。僕は、何という事のないこの名称のもとに、一瞬ごとに僕の予見をかわした一言語の歩みと呼んだのである。それは習慣を身につけることを拒み、内にふくまれた観念の眠りこみ固くなったグループを必ず打ち壊し、速読する者の経験が無効にするのであった。

文字としては書かれていないこの探究の絶えざる作用が、僕の内、ページが直接に語りかけている事と分離するのを、僕は感じた。ある種の独立性が書かれた言葉とこの種の意志あるいは一連の処置との間に存在するのが見えてきて、分析を促すのであ